



江戸時代の寺子屋では、どんなことを勉強していたの

読み・書き・そろばんを勉強した

江戸時代、ふつうの人の子どもに読み・書き・そろばんを教えたところを、寺子屋といえます。

寺子屋は、江戸時代の中ごろにできましたが、ここに通ったのは、5～6才から12～13才の子どもたちでした。江戸時代は、商業や工業、農業などが発展してきたため、仕事や生活に必要な知識・技能・道徳などを身につける必要がありました。「往来物」という、さまざまな種類の教科書のようなものを使って、「いろは」の読み方や、いろいろな書類の読み方、手紙の書き方、習字やそろばんなどを学びました。

江戸やおおさかなどの大都会では、教養を身につけるために、茶道、華道、漢字、国学などを勉強することもありましたが、ふつうは、習字やそろばんが中心でした。

1教室1教師で、生徒は20～30人

寺子屋の多くは、先生が自宅を開放して、20～30人の生徒を教える、1教室1教師でした。中には生徒が100人をこえる教室もありました。先生の多くは、お坊さん、失業した武士、神主さん、お医者さんなどでした。

入学や退学は自由です。江戸時代の終わりごろには、当時の子どもの半数近くが、寺子屋で勉強していたといわれています。（監修・田代 脩）

